

看板に焼き付けたコロナ禍の東京 Chim↑Pom

有料会員記事

編集委員・大西若人、千葉恵理子 2020年7月15日 17時30分

シェア

ツイート

ブックマーク

スクラップ

メール

印刷

list

0



「May, 2020, Tokyo」の展示

東京・渋谷駅の岡本太郎の壁画に場面を「付け足し」たり、事故直後の福島第一原発近くに乗り込んだり。「現実」にどんどん関わっていくスタイルで知られる6人組の美術家集団「Chim↑Pom（チンポム）」が今、新型コロナウイルスに伴う緊急事態宣言の東京を、ビルボード型のアートに定着させ、発表している。これまでも「都市」を舞台にプロジェクトを開拓してきた彼ららしい作品だ。リーダー的存在の卯城（うしろ）竜太（42）は、「コロナウイルス自体ですが、人々の暮らしに介入してくる緊急事態宣言」という初めての事態に関心があった」と話す。

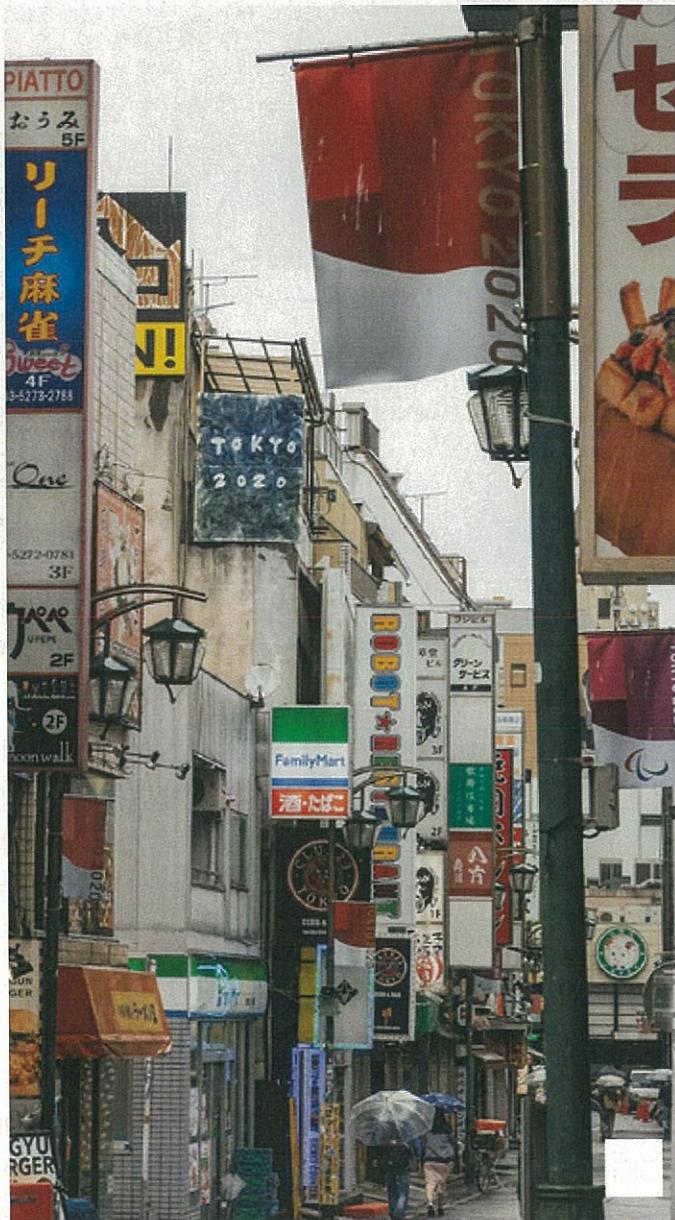
東京・東品川のギャラリーANOMALY。倉庫を改修した薄暗い空間に立ち並ぶのは、8枚の看板（ビルボード）だ。青地に白い文字で「TOKYO 2020」と記されたものが多く、「新しい生活様式」という看板もある。緊急事態宣言中の東京の街に、建築図面などに使われてきた青写真の感光液を塗った看板を掲げて放置し、変色させた。紙で覆った部分が白い文字に。作品は、「May,2020,Tokyo」と題した。

岡本太郎の壁画だけでなく、渋谷の街で捕まえたネズミを作品のテーマにしたり、新宿の解体直前のビル全体を作品化したりと、Chim↑Pomは、これまででも都市や建築を扱

つてきた。

「僕たちは別に『都市マニア』ではないんですが、都市にいるネズミやカラス、下水道といった、みんなが見ないようにしているもの、でも絶対に消えないものを取り上げてきた。街を一つの公共圏と考えたとき、そういうものが見えないようにうまくデザインされているが、それらが忌み嫌われるには理由と歴史があることに気付いた」

そんなChim↑Pomにとって、「緊急事態宣言 の瞬間の街って、帰還困難区域と同じように、特殊なものに思えたんですよ」。そこで目を向けたのが、「青写真」。建築や都市と相性がよく、「将来図」の意味も託されている。



看板の感光中をとらえた「May, 2020, Tokyo (人間レストラン) -青写真を描く-」

Photo : Chim↑Pom Courtesy of the artist and ANOMALY.

「街ってコミュニケーションの場なわけですが、その機能が失われた。でも、人とは会えなくなつたけど、『外』自体が変わつたわけじゃない。そのへんを考え始め、青写真な

ら紫外線で黒くなり、雨で流されると青くなる。周囲の影も焼き付き、時間がたてばエイジングされる。それって外の自然によってできた変化なわけです」

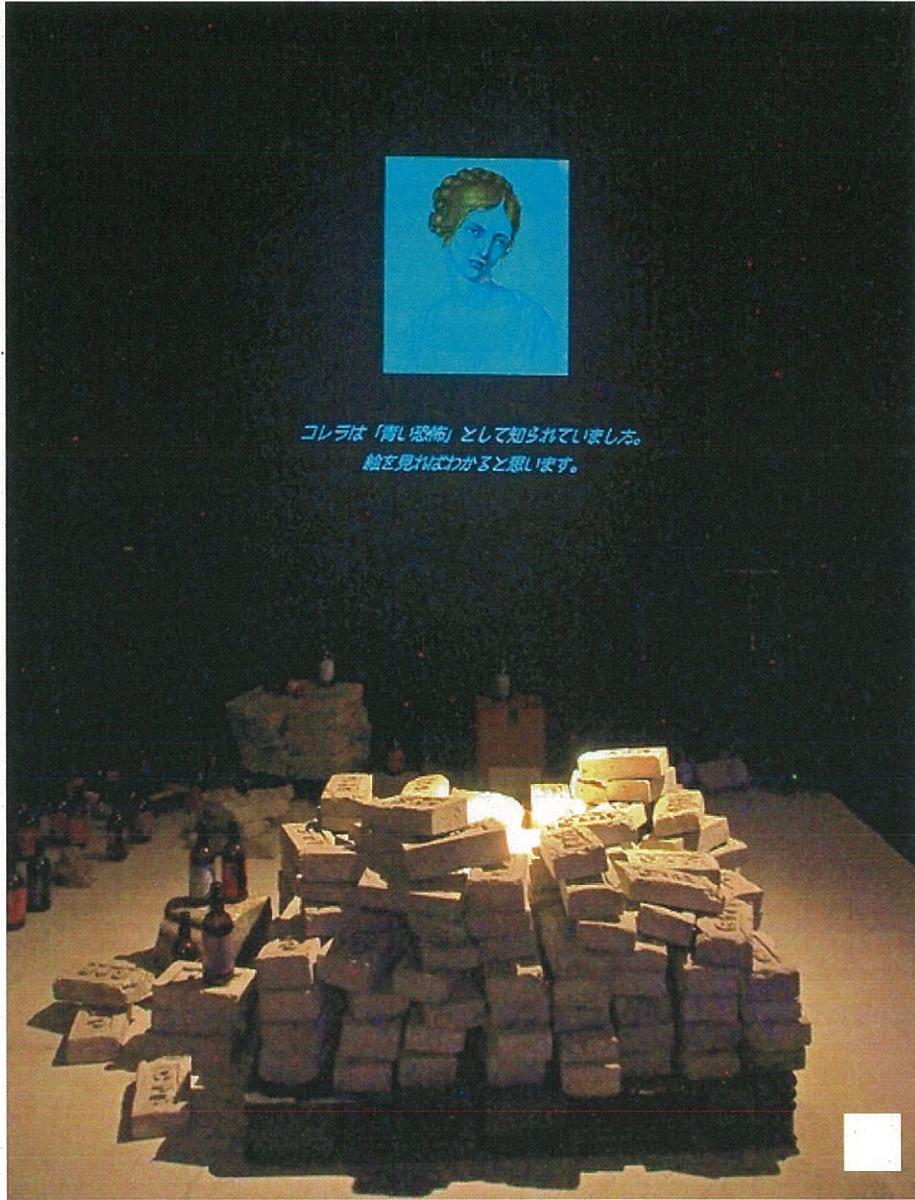
「3.11の直後に、岡本太郎の壁画に付け足したときは、街に不特定多数の目があったから機能したストリートアートだったけど、今回は逆に見る人がほとんどいない状態。その逆説的で特殊な状況になった街を記録しようと思ったんですね」

だから、ビルボードの形式が採用された。

「その頃渋谷では、掲示が減って真っ白になっている広告板があるとも聞いていました。ビルボードらしい標語を考えたとき、『TOKYO 2020』は、アイロニカルでアイコニックに思えた。今でも五輪とパラリンピックに向けて、街にはそう書かれたバナーとかがめちゃめちゃ出ているんですが、そうやって絶対的な青写真を描いてきたのに、延期になった。一方で、来年開催できても、『東京2020』は名称として引き継がれるという。まだその青写真を描き続けているということです。開催できたら、『人類はコロナに負けなかった』ということを言えるから、2020が来年に引き継がれるのでしょうか」

「新しい生活様式」という文字も、青写真の看板に記した。

「生活様式って言葉は、これまであまり使われていなかつたんじゃないですか？響きが面白いですよね。そこに『新しい』がつく。生活は個人のものですが、公的に『新しい生活様式』が今後のビジョンとして全ての個人に宣伝される。たくさんのスローガンが生まれたコロナ禍の2020年らしい、個と公の未来の描き方に思いました」



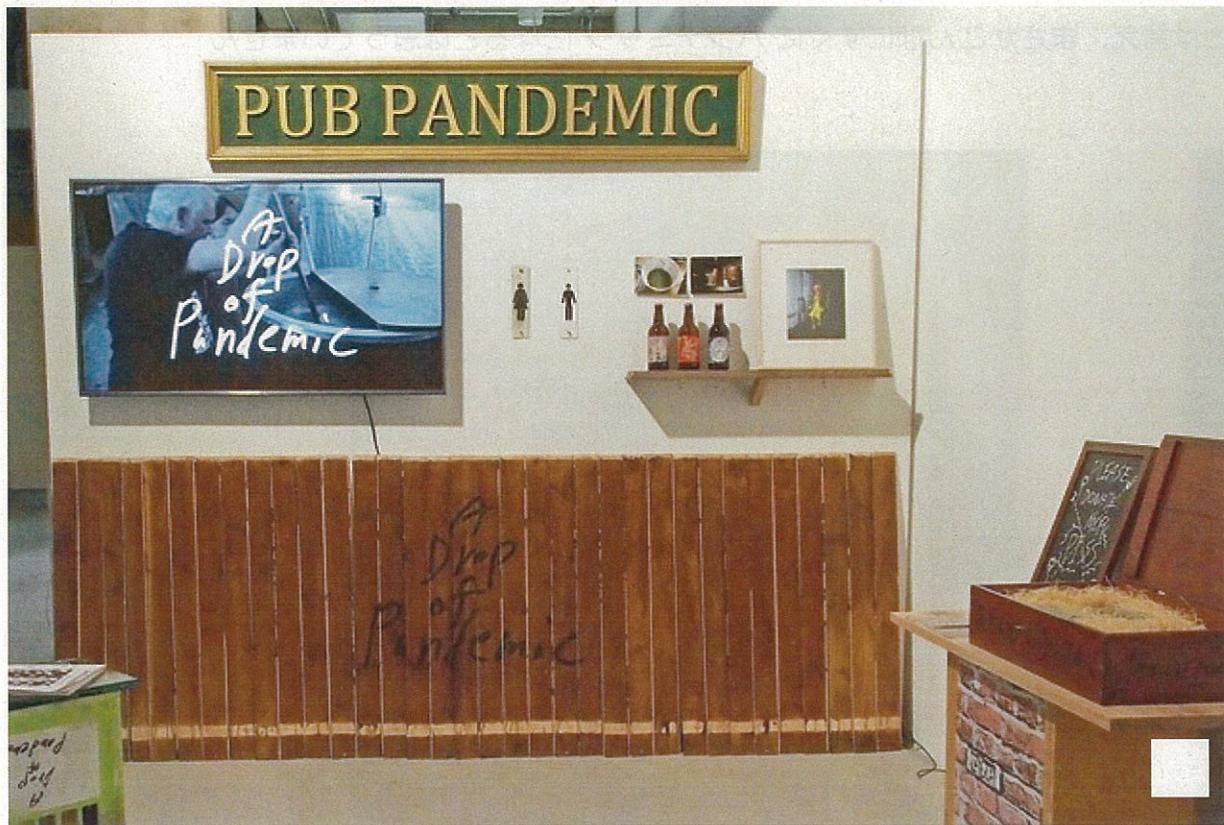
積み上げたれんがや映像で構成される「A Drunk Pandemic」の展示

ギャラリーで展示して、改めて、この作品には何が表れていると考えたのか。

「二つのことが写っていると思う。一つは、人は外に出なくなっていても、外気や自然は変わっていないということ。作品は、その証明になっている。もう一つは、標語を通じて社会の変化、欲望やむなしさのようなものが焼き付いていると思います。ある瞬間が記録されているという意味では、たとえば10年後ぐらいには、また見え方が違っていると思う」

別の空間的な作品「A Drunk Pandemic」も展示している。「パンデミック」と題されているが、驚くことに昨年の制作だ。

昨年、英・マン彻スター市で展開したプロジェクトの再現版にあたる。産業革命で栄えつつコレラの大流行も経験した史実を踏まえ、その死者を埋葬したエリアの廃墟に、ビールの生産場を造った。ビールは労働者の飲料であり、コレラ流行時には水代わりになつたからだ。



Chim↑Pomがマンチェスターにつくったパブの雰囲気も再現されている

「コレラの流行は、産業革命や貿易がかぎになっていて、人の移動が増えてパンデミックになった。今回もグローバリズムの移動と資本主義のなかで、あっという間に広がった。仕組みは同じだな、と」

「コレラのことをリサーチしているとき、『不道徳論』というのがあったんですよ。労働者や貧乏人、飲酒者が多く感染していたから、富裕層はこれを不道徳な人間がかかる病だと。その不道徳な生活を変えるために、公衆トイレや下水道といった衛生面の改革が進んだという説があります。エイズの時の「ゲイ」や、今の『夜の街』にも似たようなものを感じます。感染症から不道徳論が生まれ、差別につながる」

公衆トイレなどのイメージから、Chim↑Pomが造ったパブでビールを飲んだ人の尿を混ぜたれんがも作った。住宅などに利用し、「もう一度、街に戻す」企てだ。今回の個展でも、展示室にれんがを積み上げ、現地の映像を流している。

アーティストの驚くべき予言力なのか。

「予言では全然ありません。現代の都市はうまくデザインされていて、いろんなものが隠されている。例えばネズミの存在などはその一つですが、それが暗部になる背景にはペストの歴史がありました。感染症を克服する度に人類はそういう存在を表面から追いやつてきた。しかし同時にそれらはタブー化するから、ネズミや下水道への当事者意識はもちづらくなりますよね。結果、歴史も見えなくなり、発端となった出来事自体はファンタジーのようになる。だから同じようなことが繰り返されて、僕らの作品が予言に見えるんだ

と思います。とは言え、まさかこんなにすぐにパンデミックになるとは思っていませんでした



Chim↑Pomの卯城竜太さん

「それに不道徳で危険とされるものって、独自の生態があって、生き生きしていることが多いんですよね。だから僕らはそれらにインスピアイアされることが多い。そもそも道徳というのは、「到達し得ない善」を目指し続けるプロセスそのものだという説もあります。となると、善いか悪いかということとはイコールではないし、もっと言えばマジョリティーかマイノリティーかの違いではないはずなんですね。不道徳なのはむしろ、『これは善い、悪い』と答えをだして、自身を『問う』ことをやめる姿勢そのものなのではないでしょうか？」

今の日本の状況は、どう見ているのだろう。

「これまで『働き方改革』やコミュニケーションのあり方など、もっともな思想や運動で、世の中を変えようとする動きはあった。でも、そんな生活や社会の価値観が、今回、一瞬にして変わった。働き方も変わったし、世界中の資本主義国が経済よりも生命

を優先した。変わらぬはずないほどに絶対的だった五輪も、ウイルスごときで延期になつた」

「一方で、市民にも緊急事態宣言を求める声が大きかったように、権力と市民の関係性にも変化が生まれそうです。オンライン化は進みましたが、それが今後の熾烈（しつ）な監視社会のターニングポイントにもなるでしょう」

Chim↑Pomは、社会の動きと向きあうような作品を相次いで発表してきた。

「今回の展示で訴えたいことがあるわけじゃないけど、人類って今のところは根本的には変わってないもんだなって思った方がいいと思いますね。僕らにとって（世の中の動きは）批判対象ではありません。記録すべき一つのモチーフなんです。うーん、でも個人的には注視している感じですね」（編集委員・大西若人、千葉恵理子）

▽Chim↑Pom個展は22日まで、東京都 品川区 東品川 1の33の10のANOMALY。日、月曜休み。

